

こうなれば、己れに手に負えない不可能なことのみに興味を感じる年代というものがあるが、それを称して老人性痴呆症というのだろう。所詮、人生とは、それも終りに近づく年代になるほどに、その終漏はつつましく、或は破滅的に二者選択をえらばされるのかもしれない。この本にしても、すでに名のある本屋は1億という金額をハジキだす。この本の発想を狂気と呼ぶことで、あえて自らの事業を過大評価するしか、事業の経絡はあり得ないのである。それ故に私は、失敗者か発案不能者しか味方につけることが出来ない、そんな季節いま私は己れの59歳にして節を屈することが、はたして出来るであろうか、例え1ページたりとも実現せずとも私は、私の名誉にかけて不能の出版者を選ぶ、その者のみが不可能に対して「ウイ」と応じるからである。その挑戦のみしか画家には残された生はほかにはないのである。確かに、ほかにある。さがせばいくらでもあるかもしれない。しかし、私は欲しない。何故なら私には適応する能力がないからである。そして、その適応する能力を侮蔑する。何故なら、その能力が自分自身にないからである。

もう一度いおう。私には出来ないことのみに興味あるのだ。そして、いま、それも消え失せてしまったのだ。いふなれば、クドイが実現不可能な、この本の出版のみにエネルギーは転換され、我が人生を大きく見失っている「ヨロコビ」に胸が躍っているのである。桜井は失敗を望むといわれても驚きはしない。そんな小さなことに驚くほどの体力は、すでにない。すでに人生に終りを告げようとする者にとって、大義名分は必要ではない。確に微妙な話である。そして、またしてもない物を語る不安であり、不安に安心する年代なのである。過ぎ去り、失うものは大方、失ってしまった人生である。その意味のみににおいて化石の時代なのである。面白いといえば、これほど面白いことはない。すでに私は私を忘れてしまっているのだ。それで、なおかつ、画家であり得る、そんな都合のよい時間、空間が許されているのか。いふなれば、いま、私が興味を持っているものといえば、三寸先は真っ暗闇の夜であることである。この興味の交替は、いったい何処からきたのであろうか。確かに牢獄にはいって失うものは何もなかった。得たもののみである。確かに生とは得るものの言いであらうか。死とは失うものであるのか。プラスとは得るものか、マイナスとは失うものなのか。人生とは、まずは、それらの概念を作ったとことから必ずしも判って創造したのであろうか。その殆どは、単にこの地球上に生を得たということではないのか。この地球と生物としての人間の果てしない因果関係の中に生死は、からくも交替して、その意味を問いつづけていると言え、すでにその問いは人間の城を越えていると言わねばならない。いや、人間の頭深に居するすべては、すでに予定されたタンパク質の物質の許容範囲の出来ごとであるのか。さて、地球とはであるのか。その起源において、すでにツマづく失敗することしか許されていない生物とは、いったい誰を指してのことか。